

令和8年度 きゅうり技術情報 No.2

大船渡農業改良普及センター
 電話：0192-27-9918
 FAX：0192-27-9936



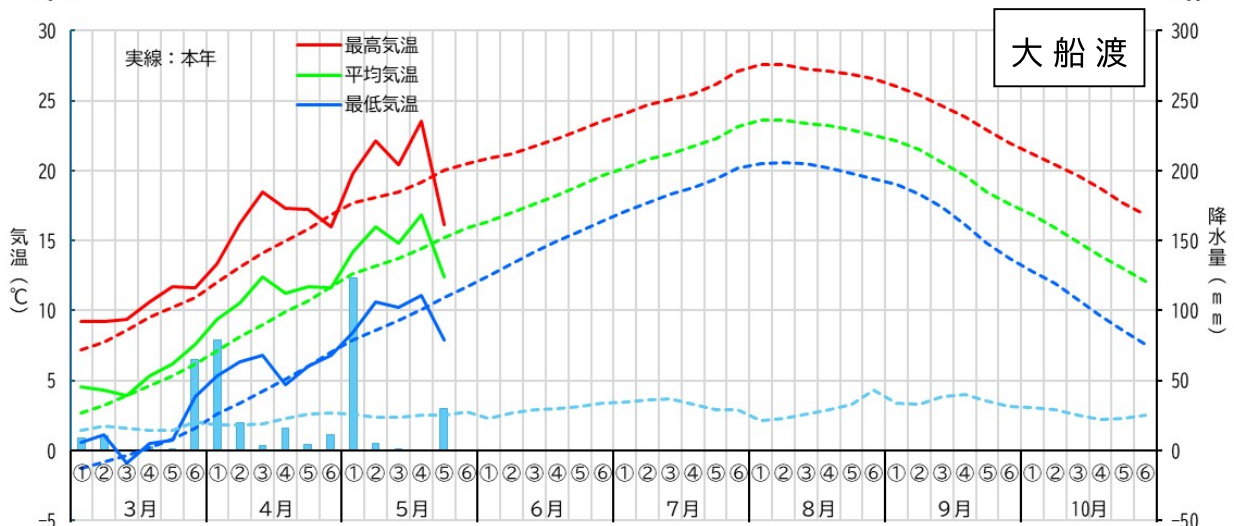
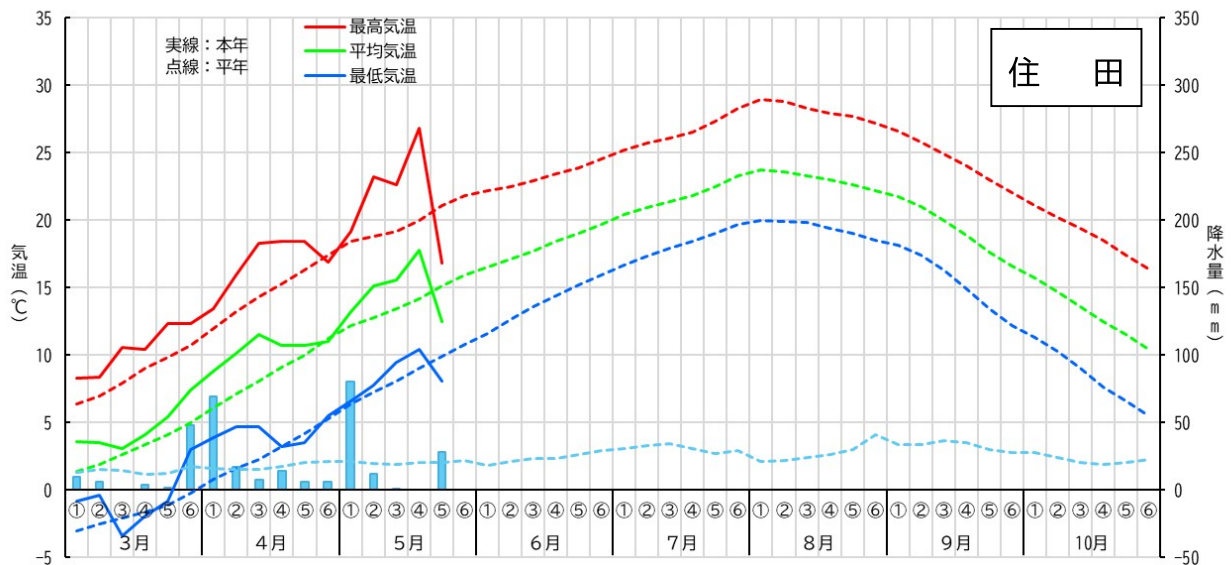
- ① (ハウス) 収穫開始後はかん水量を増やし、午前中の湿度を維持しよう。
 - ② (露地) 高さ40 cmまでの雌花と側枝は摘除し、草勢を確保しよう。
 - ③ (病害虫) 6～7月は斑点細菌病、べと病、アブラムシ類に注意しよう。
- 病害防除は発病前からの予防、ホモフシスは地域で拡大防止の徹底を！**

1 気象経過と今後の予報

(1) これまでの気象経過と生育状況

気温は平年より高く推移しましたが、4月下旬と5月下旬は平年より低くなりました。また、一時的に降水量が多い時期がありました。

ハウスきゅうりの活着や生育は概ね順調ですが、乾燥等の影響で節間がつまり気味のほ場も見受けられ、一部ほ場では、アザミウマ類の発生も確認されています。



(2) 今後の予報

仙台管区气象台の発表（5月19日）の3か月予報では、6月～8月の気温がいずれも平年より高い見込みで、降水量は、ほぼ平年並の見込みです。

昨年の梅雨入りは記録的な早さで6月4日頃、平年では6月14日頃です。梅雨入り後は、病気が発生しやすくなるため、予防散布を徹底しましょう。

2 ハウスきゅうり

(1) かん水、追肥

1日のかん水量の目安は、**収穫開始以降：1.5～2.0L/株**です。きゅうりの必要水分量が大きくなりますので、曲がり果やくくれ果等が発生する場合は、かん水量を増やしましょう。

また、ハウス内が**乾燥する場合は、積極的に通路散水し、ハウス内の湿度を維持**しましょう。光合成促進のため**午前中は75～80%、午後は病害予防の観点から60%程度**を目安とします。

追肥は、果実収穫開始ごろから積極的に行いましょう。追肥量の目安は、**収穫量800kg（160ケース）/10aごとに窒素成分で2.5～3.0kg**です。

(2) 温度管理

日中の最高気温が30℃を超えないように、側窓や入口を開けて換気を行いますが、**急激に湿度低下を起こさないよう、徐々に換気**します。

(3) 整枝管理・摘葉

充実した側枝の発生を促すためには、側枝に光を当てることが重要です。主枝摘心期以降は、**下～中段の葉が特に混みあってきます**。曇雨天を避け、収穫作業と合わせて**随時摘葉**しましょう。

3 露地きゅうり

(1) 定植後1か月の初期管理

生育初期に十分に根を発達させることは、長期安定生産の重要ポイントです。これは、ホモプシス根腐病対策としても非常に重要です。

定植後、**段階的に高さ40cmまでの雌花と側枝を摘除**し、主枝の草勢を確保します。**主枝の着果位置は、高さ50～60cm**とし、それ以下には着果させないようにします。

(2) かん水

定植後1週間程度は、活着促進のために株元を乾かさないうにかん水をしましょう。活着の目安は、葉の枚数が定植時の倍の枚数になり、巻きひげが太く張ってきたころです。活着が確認されたら、株元かん水を控え、根を深く張らせましょう。

(3) 摘葉

本葉が 15～16 枚になったら、主枝の下段 2～3 枚程度摘葉します。草勢維持のため、株当たり一度に 2～3 枚以内を原則とし、過度な摘葉とらないように注意しましょう。

4 薬剤散布のポイント

- (1) 6月は**アブラムシ類、黒星病、斑点細菌病**、7月は**アブラムシ類、ハダニ類、べと病**に注意しましょう。
- (2) **防除暦を参考に、定期的に薬剤散布を実施しましょう。**農薬を使用する際は必ず農薬ラベルを確認し、使用基準を遵守してください。
- (3) 薬剤散布では、**アーチの内側と外側の両側から葉の表裏、下位葉まで十分な量の薬液がかかるように散布しましょう。**特にアーチ上部は、薬剤が付着しにくいいため注意が必要です。
- (4) 病気が蔓延した後では薬剤の効果が低くなります。**病気が疑われる葉は見つけ次第、摘葉し、発生が少ないうちに特別散布を実施しましょう。**

病虫害名	6			7			8			9		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
アザミウマ類 (ハウス)												
ハダニ類												
アブラムシ類												
べと病												
うどんこ病												
黒星病・斑点細菌病												
炭疽病・褐斑病												

□ : 発生時期 ■ : 重点防除時期

図 1 病虫害の発生時期の目安 (アザミウマ類以外は露地での発生時期)

5 主な病害虫の特徴

(1) 黒星病

発病適温は 17～20℃前後と比較的低温で、定植時や収穫期の後半に降雨が続くと多発します。生育初期に多発すると被害が大きいため、やませが入るような地域では特に予防散布を徹底してください。



図2 黒星病の葉

(2) 斑点細菌病

発病適温は 20～25℃、多湿条件下で発生します。降雨が続くと発生が助長されます。



図3 斑点細菌病の葉

(3) ベと病

20～25℃の多湿条件下で発生するため、梅雨期が重点防除時期になります。古い葉や下葉から発生しやすく、肥切れや成り疲れなど、草勢が衰えると発生が増えるため、肥培管理に注意してください。

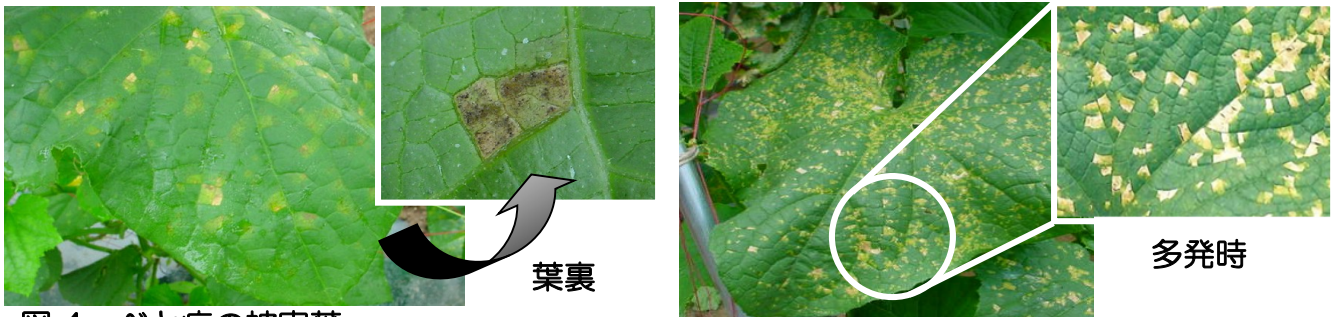


図4 ベと病の被害葉

(4) ハダニ類

ハダニ類は多発させると防除が困難で、著しく草勢が低下します。ほ場周辺の雑草等から侵入してくるので、初期の寄生部位である下葉を定期的に観察し、発生を確認後は速やかに防除してください。



図5 ハダニ類

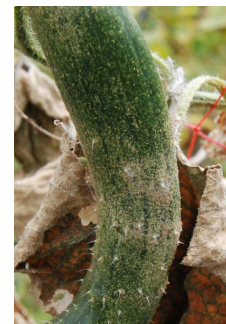


図6 ハダニ類の被害 (左：葉、右：果実)

(5) アブラムシ類

5月から9月まで発生があり、夏期に発生が増加します。生育前期は生長部の若い葉やつる、生育後期は展開葉や花に寄生し、吸汁加害します。被害が増加すると生育が妨げられるほか、**CMV、ZYMV 等のウイルス病を媒介するため、発生を確認後は速やかに防除**してください。ウイルス罹病株は、見つけ次第抜き取り処分します。



図7 葉裏に寄生したアブラムシ

6 ホモプシス根腐病の拡大防止対策 **地域全体で拡大防止を意識しよう**

- (1) 症状：収穫開始から8月にかけて発生が多くなります。収穫初期では、日中に**葉が萎れ**、夕方に回復します。萎れと回復を繰り返すうちに、徐々に**下葉から枯れ上がり**ます。
- (2) 伝染経路：**土壌伝染性で空気伝染はしません。汚染圃場の土が人や機械を介して移動し伝染します。**
- (3) 拡大防止対策：他の生産者のほ場を訪問する際は、**靴カバーの使用**や**ビニール袋で靴を覆う**等、病原菌の拡散防止に努めましょう。
既に発病した畑がある方は、他の畑に広げないように、**機械の洗浄を徹底、使用する靴を分ける**等の対策を行いましょう。



日中は葉が萎れる



病気が進行し、枯れた株

図8 ホモプシス根腐病が発生したほ場

写真のような症状が見られた方は農協または普及センターまでご相談ください。

★いわてアグリベンチャーネットメールサービス会員募集中

農作物技術情報や農村地域の情報を幅広く提供する岩手県公式サイト「いわてアグリベンチャーネット」のメール会員を募集します。

登録方法は以下のホームページをご覧ください。

URL: <https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/maillinglist.html>

★6月1日～8月31日は農薬危害防止運動実施中

農薬を安全かつ適切に使用するために、農薬ラベルでの使用基準の確認、使用履歴の記帳を徹底しましょう。